

せ と る

く お - た り -

# C.E.T.L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.14

発行日 . 2004

## 巻頭言 共通科目運営センターの試み

共通科目運営センターが発足して、1年が経過した。従来の方法からセンター方式への移行に伴い、運営方法並びにカリキュラム等、いくつかの改正が行われた。運営については、11の科目群にわたる共通科目を「人間教育の基礎部分を担う『共通基礎』」と「豊かな文化や人類の平和を志向する『共通総合』」に大別し、それぞれに担当部会を設置した。その上で、各科目群ごとに科目担当者連絡会議を開催し、シラバス、授業担当、授業方法などを立案し、それを担当部会で検討、共通科目運営センター運営委員会で審議するという組織となった。共通科目を担当する教員や各学部の意見を集約し、全学的な観点で広く意見を求め、共通科目の運営と本学の教養教育の充実に努めている。三層構造の委員会構成のため、従来の方式に比較すると会議数が増えたが、教職員の協力を得て、センター方式の2年目を迎えることができた。

カリキュラムに関しては、新しい科目群や「文章表現法」、「大学史の中の創価大学」、

共通科目運営センター長 馬場 善久

「人間教育と人間理解」、「21世紀文明論 B」などの講義が設置された。これらの講義は昨年一定の履修者を得ており、公開された授業アンケートの結果も概ね学生の評価は良いようである。複数の学部によっては言語系以外の科目群についても選択必修の単位を設定した。それらの学部では、当該科目群の履修者数の大幅な増加がみられた。今後、履修・成績データ、授業アンケートの結果をはじめ、新カリキュラムの目標の達成状況についての検証の結果を待つ必要があるが、昨年一年は順調なスタートがきれたと考える。

本年4月より国立大学が独立行政法人国立大学へと移行した。大学評価・授与機構が機関別認証評価に関する大学評価基準(案)を発表し、大学基準協会も学士課程基準の見直しを行った。それぞれの機関が学校基本法の改正に伴う認証評価機関による「大学評価」の時代の準備を進めている。法科大学院の開設により、専門職大学院の幕があき、学士課程教育における教養教育重視の流れが

強まると予想される。大学評価における教養教育に対する評価のウェイトが増すことも考えられよう。本年度より、共通科目運営センター教育研究検討委員会において共通科目の運営に関して、自己点検・評価を着実に進め、本学における教養教育の改善に取り組みたい。

国際的に通用する大学評価のあり方が問われる時代にもなっている。折りしも、先月ハーバード大学において学士課程教育の見直しの中間レポートが発表された(詳細は

<http://www.fas.harvard.edu/curriculum-review/>を参照のこと)。国際化と情報化が加速度的に進み、変化が激しい時代に、21世紀初頭における学士教育の意味を問い直す内容となっている。本学においても教養教育を含めた学部教育の理念と目標の一層の明確化、そして、その目標を達成するカリキュラムの編成と実施とその検証というサイクルを定着させ、学部教育のより一層の改善を目指したい。

---

---

## アメリカ諸大学の学習支援事情視察報告

教育・学習活動支援センター員 岡田 勇 (経営学部)

COL 選定は CETL に 2 つの期待を与えた。一つは、本学内における重要拠点としての再評価であり、もう一つは、先進的・模範的活動に対する学外からの期待である。今回の視察は、これらの期待に応えようとするものであり、坂本センター長は、日程や訪問先の選定に始まり、関係者との会見や、航空機・ホテルの予約まで一手に引き受けられて、その責務を果たされた。私は光栄にも視察に参加させていただいたので、不十分で恐縮であるが、ここに概要を報告したい。

視察団は、山崎教務部長を団長に、坂本センター長、関田副センター長、教務課の

竹内幸一氏とセンター員である私の 5 名であり、本年 3 月 9 日から 14 日にかけて渡米した。個人的には、竹内氏の参加は職員の海外視察への扉を開く慶賀であると感じている。



アメリカ創価大学

3月10日、開学3年目のアメリカ創価大

学を訪問した。ハプキ学長自ら出迎えてくださり、様々懇談させていただいた。大学としては「今は創業期ならぬ自転車操業期」とご多忙の様子であられたが、「素晴らしい学生に恵まれて感謝している」と仰っておられたのが印象的であった。また、大学教務関係の実情をヘイズ教務部長に、学生生活についてフィーゼル学生部長に伺った。クラスごとにオフィスアワーを設定していたり、教員がアドバイザーとして学生の様々な相談に応じたりする制度が有効に機能しているようであった。個人的には、ベスト・ティーチャー制度や大学にセキュリティ課が存在している点などに興味を持った。食堂ではあたかも創大のように、学生たちが活発な議論を交わしていた。

翌 11 日は、名門スタンフォード大学の CTL (Center for Teaching and Learning) を訪問した。1975 年設立という世界的にも長い歴史を持つ「老舗」である。マリノビッチ所長は、最初の十数年は専任スタッフがいなかったこと、実績をどう出しそれを大学にどのように認めさせてきたのかなど、当事者にしか分からない貴重な体験を誠実に語って下さった。坂本センター長も「大学教育改革に企業秘密なし」と感嘆されていた。個人的には、ポートフォリオや学生評価のための評価指標など多くの Tips を開発しており、大変に参考になった。



LAC のオフィスにて (中央がドレメン所長)

12 日は、サンフランシスコ州立大学の LAC (Learning Assistance Center) を訪問した。我々の訪問に対し、きれいにファイリングされた書類一覧を人数分用意し、日本人の大学院 TA も同席させるなど、用意周到な対応にドメレン所長の優しさが滲み出ていたと感じた。所長の人格そのままに、学生への学習支援が極めてきめ細かくなされており、大いに参考になった。例えば、プライバシーの観点からデータベースを独自に作成し、1 万名近い学生の学習スキル向上に、専任の教員やスタッフそして TA が献身的に貢献していた。また、所長は本学をご存知のようで、大学理念に対して強く賛同されておられた。

慌しい視察ではあったが、訪問した 3 大学とも、リーダーの優れた人格が組織と見事に調和して実績をあげており、リーダーシップの重要性を再確認させられた。また、スタッフの献身が重要であることを認識し、自身の糧とすべきであると強く感じた。

## 特色ある大学教育支援プログラム選定記念

### 創価大学 FD フォーラム特集

CETL を中心とする教育・学習支援の取り組みが、2003 年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたことを記念して、3 月 5 日創価大学「FD フォーラム」が開催された。大学教員の他、本学の教育・学習支援の取り組みに関心を寄せる高校教員、教育委員会・教育専門誌関係者など、内外合わせて 230 名を越える参加者が本部棟を訪れた。

教授法ワークショップでは、講義法、LTD 学習法、協同学習法をテーマに 3 つのセッションが用意され、それぞれに、佐々木一也教授（立教大学）、安永悟教授（久留米大学）、杉江修治教授（中京大学）をコメンテータにお迎えした。本学教員による教授技法の紹介・提案についてのご批判を頂戴し、参加者を巻き込んだの活発な討論が展開された。

#### セッション 1.

#### FD フォーラム「講義法セッション」を担当して

法学部 高村忠成

「講義法セッション」を担当して驚いたことは参加者が 200 名ほどおられ、皆さん熱心に耳を傾けて下さったことである。まず私が、「国際政治論」のモデル授業を 1

続いて、鈴木寛教授（国際基督教大学 FD センター主任）による記念講演が開催された。「FD 活動がめざすもの」を講演テーマに、「学生中心の大学」づくりを理念に掲げる本学の教育・学習支援活動に対して、貴重なご提案を頂くことができた。



各セッションを担当した高村忠成先生、勘坂純市先生、関田一彦先生から感想を寄せて頂き、坂本センター長にはフォーラム全体を総括してもらった。

参加された先生方との間で質疑応答を行なった。



そうした中で出された意見は、講義法のポイントは声の大きさ、話すスピード、ていねいな板書、そして何よりもその日の講義が何をメインにしているか、学生に伝えたいメッセージがはっきりしていることなどが重要であるということであった。とくに、講義している方に感動がなければ、学ぶことの楽しさは伝播しないであろう、との意見が印象的であった。

## セッション 2.

### LTD 学習法と私の取り組み

経済学部 勘坂純市

LTD (Learning Through Discussion ディスカッションを通じての学習) のセッションを担当させていただいた。一年前に安永悟先生(久留米大学教授)のお話を聞いて興味をもち、いくつかの講義で LTD 試みしてみた実践報告である。自身で準備をして討論に取り組む LTD では、学生が受身の講義等では見せない意欲やパフォーマンスをしばしば見せる。報告では、まず、LTD によるこうした学習効果を紹介させていただいた。しかし、初めての取り組みであり、この学習法にいくつかの疑問点を感じたことも事実である。報告では、「講義との併用の可能性がないか」など、いくつかの疑問も提示させていただいた。



こうした率直な質問に丁寧に答えていただいた安永先生、また多くのコメントを寄せてくださった参加者の先生方に感謝している。万能の教授法などないかもしれないが、こうしたセッション積み重ねが「よりよい」教授法を作り出すことは間違いないであろう。

### セッション 3.

## 話し合い学習を効果的にする工夫

教育学部 関田 一彦

私自身が講師を担当して、本学で協同学習法のワークショップを行うのは2度目である。内容的に重複する箇所も多く、こじんまりとした集いになるだろうと勝手に思っていたが、50名近い先生方に参加していただき、少々驚いてしまった。

今回はスペンサー・ケーガンという方が研究・開発してきたストラクチャと呼ばれる技法のいくつかを参加者に体験してもらいながら、その特長や効用を解説した。他大学からの参加者が、やる気の乏しい学生相手にどこまで通用するのかという質問をされたが、これは難題である。学生の側に学ぼうとする意欲がある創価大学で教鞭をとれる幸せを改めて思ってしまった。コメ

ンテータの杉江先生からは、話し合いの手順や話し合うべき課題を明確に示すことが協同学習の要である、との大事なアドバイスをいただいた。これを受けて、さらに充実した授業を行っていきたい。



(協同学習に関心のある方には [www.kyoudo-edunet.jp](http://www.kyoudo-edunet.jp) という Web ページがお勧めです。)

## 教職員と学生が一体となったFDフォーラム

三つのワークショップと記念講演、そしてレセプションで構成した今回の FD フォーラムは、すでに『CETL クォーターリー号外』でも触れましたように、「外部講師の先生方のご教示を乞う」という通常の大学でよくある形式のフォーラムではなく、自前の講師を用意して「外部講師の先生方と共に考える」

教育・学習支援センター長 坂本辰朗

フォーラムになったという意味で、創価大学の FD 活動の実力と実績を内外に示したものにになりました。

さらに今回の FD フォーラムは、第二の草創期を迎え、教・職・学が一体となって新たな大学建設に取り組んでいる創価大学にふさわしいものとなりました。

フォーラムの広報から会場の設営、さらに当日の運営まで、職員の方々の献身的な尽力は、隅々にまでゆきわたり、フォーラムの大成功に結びつきました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

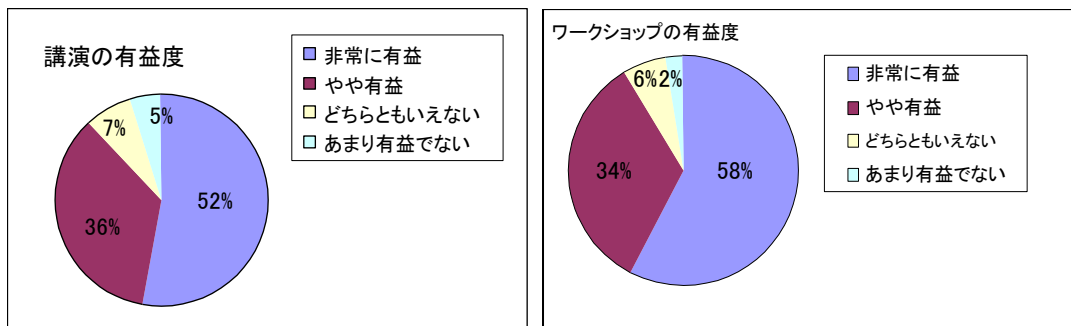
フォーラムへの学生の皆さんの参加というアイデアは、高村先生の講義法ワークショップのコメントをつとめていただいた佐々木一也先生（立教大学教授）と私との打ち合わせの中で生まれたものでした。私自身も最初は、20人程度の学生参加は必要かと考えていたのですが、「それでは学生の皆さんが、ワークショップ参加の大学の先生方に囲まれて萎縮してしまいます。もっと大勢の参加は無理でしょうか」という佐々木先生のご要望は、通常の大学では春休み中であり、

まずかなわなかったものでしょう。しかし、わが創価大学ではこの不可能が可能になり、50人におよぶ学生の皆さんが参加され、講義法セッションの空間に理想的なダイナミクスをもたらしてくれました。さらにその後の鈴木寛先生（国際基督教大学教授）の記念講演の会場にも、学生代表の皆さんが参加され、共に、「より善い教育・学習のあり方」を考える一日となったことは、今回のFDフォーラムの特筆すべき成果と言えましょう。

FD活動は一種の永久運動です。今回のFDフォーラムの成果をもとに、さらに先生方のご要望を取り入れた、より優れたFD活動を考えてまいりたいと存じます。いっそうのご支援とご指導をお願い申し上げます。

### FDフォーラムアンケート集計短報

3月5日に行われたFDフォーラムには全学の3割近い教員が参加し盛況であった。その内容についてもワークショップと講演会の有益度を尋ねたアンケート結果（47名、回収率25%）によれば、90%前後の参加者が有益と判断していた。主催者への要望として自由記述された声の多くは、興味深いセッションが同時並行で行われ、一つしか参加できなかった点を改善して欲しい、というもの。多くの教員の期待に応えるべく、さらに充実した企画を考えていきたい。



## 『カレッジマネジメント』で本学 FD の取り組みを紹介

『カレッジマネジメント』126号（2004年5/6月）の特集「とまらないドロップアウトにどこまで対応すべきか」に、本学の CETL を中心とした FD 活動が紹介されている（p.14～28）。



『カレッジマネジメント』の表紙

大学、短大、専門学校における学力低下や高等教育の前提であった学習意欲の減退が指摘され、現在では退学率や休学率の上昇といった学びのドロップアウトが深刻な問題となっている。本学は金沢工業大学、新潟工業短期大学、大原簿記学校と並んで、この問題の「対応先進校」として掲載されている。

本学の優れた対応策として、学生の学びの意欲を「導入教育で定着」させていることが挙げられている。学習スキルの向上と帰属意識の喚起のため、導入教育として「基礎演習」を配置している。これは現在でこそ、多くの大学で必須のカリキュラムとなっているが、本学ではいち早くこれに着手し、1995年に

文学部社会科学部が導入している。

また、「飽きさせない授業を展開する」ための取り組みも優れた対策として注目された。「せっかく学生を教室に引っ張ってきても、授業がおもしろくなければそれで終わり。逆に教員全員が学生の興味をそらさないような授業をすれば、ドロップアウトのかなりの部分は解消されるはず」、との坂本センター長の言葉を引いて、CETL が中心となって行ってきた FD 講演会、授業見学会、教育サロンが、教員間でよりよい授業を考える契機となり、学生にとって魅力ある授業づくりの大きなファクターになっていることが紹介されている。

そのほか、CETL のホームページ、山崎純一教務部長、坂本辰朗センター長、関田一彦副センター長の写真も掲載されている（写真参照）。





## 新入生向けの「勉強法」講習会を開催

新入生向けの勉強法講習会が、4月6日にA棟の4階教室（401、402、405、406教室）において開催された。先輩（大学院生・学部上級生）による勉強法のアドバイスに、300名を越える新入生が熱心に耳を傾けた。講習会は大学の勉強に不可欠なものを中心にした内容で、高校の勉強との違い、シラバスの有効な活用と予習の仕方、教科書の役割、ノートの取り方、語学の学び方、コンピュータの積極的な使用などが解説された。また、先輩が考える勉強の重要性や意味が語られ、これからの大学生活で勉強を中心に、さまざまな経験を重ねて欲しいとの期待が述べられた。

アンケートには、「大学の勉強って何って感じで何も分からなかったのですが、少し安心しました」「こういう CETL のようなものがあるととても心強いです」「厳しい話もあったが、現実だと思うのでありがたい話だった。興味を持って選んだ学問なのだから探究心を持ってやってみようと思いました」など

の感想が寄せられ、講習会が多くの学生にとって有意義であったことがうかがえる。



新入生にアドバイスする大学院生

新入生は「質問は学問の起爆剤である」との言葉を真摯に受け止め、質問することで講義に主体的に参加しようとしている。

CETL では6月に、「レポートの書き方」講習会を予定しており、学生の学習スキル向上に取り組んでいる。これと同時に、明確なシラバスの提示や講義の組み方といった教員の教育スキル向上にも大きな期待が寄せられている。

### CETL 所員一覧

〈教育学部〉坂本辰朗（センター長）	〈経営学部〉岡田 勇
〈教育学部〉関田一彦（副センター長）	〈通信教育部〉西浦昭雄
〈経済学部〉神立孝一・小林孝次	〈工学部〉戸田龍樹・坂部創一
〈法学部〉宮崎 純	〈研究所〉小出 稔
〈文学部〉金子弘	〈WLC〉尾崎秀夫
（特別センター員）清水強志 堀館秀一 木戸和彦	

## Information

### FD 関連セミナーのお知らせ

CETL では FD 関連セミナーへの本学教職員の派遣を行っています。ご関心をお持ちの方は CETL 職員滝川（内線：2116）までご連絡ください。

- 私大連「大学の教育・授業を考えるワークショップ」  
研修日程：平成 16 年 7 月 28 日（水）～30 日（金）  
基調講演：ICU 絹川氏「評価の時代における私大教員の在り方」  
事例発表：「学生の変容と導入教育-日米比較の視点から」  
「学生による授業評価と FD との統合」  
申込締め切り 5 月 31 日
- 「ケイガンストラクチャによる協同学習法」  
研修日程：2004 年 7 月 12 日-18 日  
場所：ケーガンインスティテュート オーランドー・フロリダ
- 「各種協同学習ワークショップ」  
研修日程：7 月 19 日-23 日  
場所：ミネソタ大学協同学習センター ミネアポリス・ミネソタ
- 「工学系教員のための教授法ワークショップ」  
ExcEED Teaching Workshops for Engineering Faculty  
開催日程：9 月 16 日-18 日  
場所：ノースイースタン大学・ボストン  
\* (ExcEED は Excellence in Engineering Education の略で、AICHE、IEEE、ASCE、ASME の四工学系団体が共催しています)

### 教育サロンのお知らせ

○イスラエルのシャラン先生をお迎えして、教育サロンが開催されます。

開催場所：CETL・アネックス 時間：4 時 30 分～5 時 45 分

## 編集後記

頁数が 10 頁にもなるのは、はじめてのことです。創刊時は 4 頁でした。紙面の充実は創価大学の FD の発展を示すものです。「FD は永遠の運動」。その記録をしっかりと留めたいと思います。(U)

C.E.T.L Quarterly No.14

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町 1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 : 2148

E-mail: cetl@soka.ac.jp